食と農のリスクコミュニケーション ハンドブック

文部科学省科学技術人材育成補助事業
「リスクコミュニケーションのモデル形成事業（機関型）」
平成 26 年採択課題

国立大学法人北海道大学　リスコミ職能教育プロジェクト

このハンドブックについて

このハンドブックは、これから食と農をめぐるリスクについて、市民、行政、専門家、事業者、メディアという社会的な立場を超えて、コミュニケーションの場をつくろうとしている方のために書かれました。

コミュニケーションの場と一口に言っても、問題・課題の性質や社会の状況に応じて、内容と形式はさまざまです。ここでは問題・課題をより大きなフレームで捉え直し、それらをめぐるコミュニケーション全体を俯瞰した上で、具体的なイベントを実施することができるようになるための要点をご紹介します。

このハンドブックを手に取られたみなさんが、基本的な専門用語、概念に馴染み、知識と経験を蓄えて、ときに媒介の専門家の手を借りながら、さくりとコミュニケーションの場をつくることができますように。

食と農の
リスクコミュニケーション
ハンドブック

目次

はじめに 6
北海道大学リスコミ職能教育プロジェクト　組織図 8
現場の知恵　～リスコミ 七つの覚書 10

知識と考え方 13
リスクについて 15
リスクの問題領域 16
リスクの定義 18
リスクとハザード、ペリルの違い 20

リスクコミュニケーションについて 23
リスクコミュニケーションの定義 24
リスクコミュニケーションの例 26
コミュニケーションとガバナンスの一体性 28
事前警戒原則（予防原則） 30
リスクとベネフィットをめぐるコミュニケーション 32
食と農をめぐるリスクコミュニケーションの政策的枠組み 34

知識・情報共有について 37
専門家と市民 38
専門家の限界と相対性 40
知識· 情報共有と欠如モデル 42
リスク比較 44

対話・共創について 47
双方向性 48
社会の視点と個人の視点 50
コミュニケーションと信頼の関係 52

コミュニケーションのはじめ方 55
コミュニケーションについて考える意義 56
コミュニケーションのはじまり 58
コミュニケーション・デザイン 60
コミュニケーションの森で迷子にならないために 62
コミュニケーションを考える３つの次元 64
食と農をめぐるリスクの特徴 66
コミュニケーションのPDCAサイクル 68
問題・課題を捉えなおす 70
コミュニケーションの状況を把握する 78
コミュニケーションのあて先を考える 80
コミュニケーションの目的・機能とモードの関係 82
リスクコミュニケーションの評価 89

イベントのつくり方 93
コミュニケーション・デザインとイベント・デザイン 94
イベント・デザインシート 96
企画の趣旨・背景・イベントの目的 98
予算・財源 100
プログラムの概要 102
プログラムの詳細 112
ロジスティクス 114
スケジュール・留意点・事務局 115

北海道大学農学部の事例 117

おわりに － なぜコミュニケーションなのか 134

はじめに

リスクコミュニケーションとは何か。このハンドブックを読めば、その「答え」が分かると期待されていることでしょう。
実は、リスクコミュニケーションは学問からスタートしたものではなく、地域や社会のなかでの様々な実践から生まれてきたものです。一定の空間に存在する人たちが、どうやって折り合いを付けながら暮らしていくのか。ざっくばらんに言えば、リスクコミュニケーションはそのための一つのアイデアを提供してくれるものです。
正答が一つだけであるというものではありませんし、まだまだ明確な解答がないというのが現状です。
一人ひとりの価値観の違い、同じ現象でも科学的知見が異なる場合もあります。そうしたなかでも、みんなにとってよりよい社会をつくっていきたいというのが、時に大きな困難を抱えながらもリスクコミュニケーションをしていく動機だと思います。

私たちのプロジェクトは、文部科学省「リスクコミュニケーションのモデル形成事業」で平成24年に採択されたものです。
リスクコミュニケーターの育成ではなく、職能として身につけてほしいリスクコミュニケーション能力―「聴く耳を持つ媒介者としての」「専門性の文脈の中での媒介行為を行う」「リスク問題を多様な視点から検討できる」―の涵養をめざしました。
そのために、大学院生や社会人に向けた適正かつ妥当な教育カリキュラムを考案し、現場との協創・共創関係の構築を試みています。
その試みの中で、リスクコミュニケーションを行う際の手引き書の必要性に思い至り、食のリスクの問題と農のリスクの問題が交差する領域をも扱うことができるハンドブックを求めました。

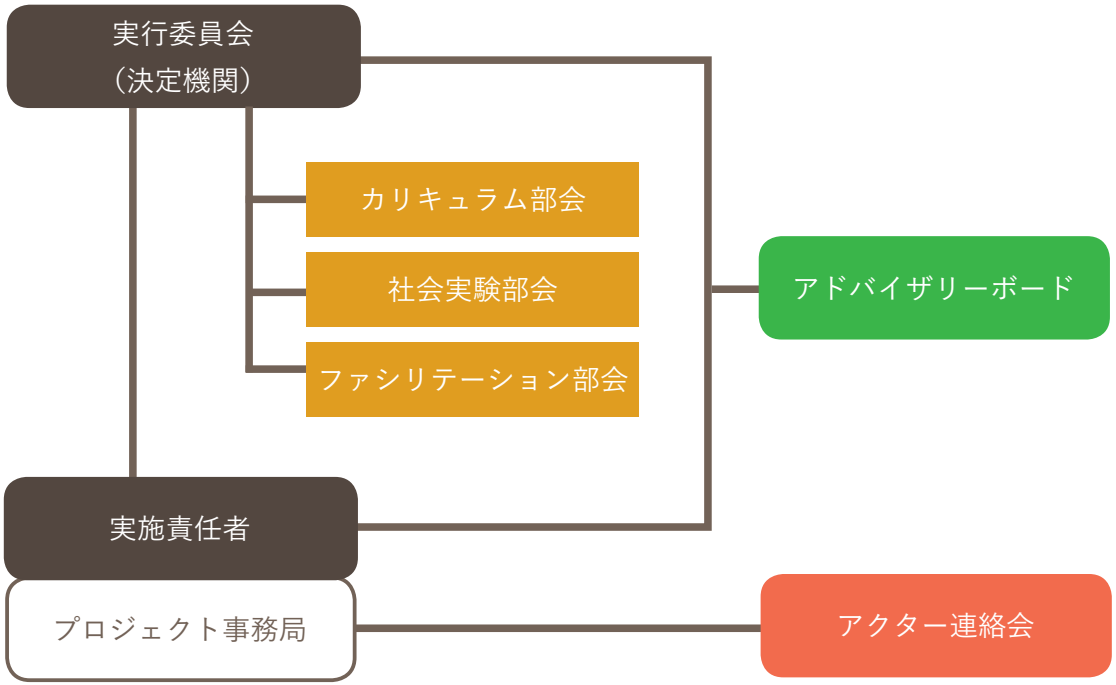
北海道大学リスコミ職能教育プロジェクト代表
北海道大学大学院農学研究院准教授　小林　国之

北海道大学リスコミ職能教育プロジェクト

組織図

詳しい活動内容については、こちらのホームページをご覧ください。

https://lab.agr.hokudai.ac.jp/voedtonfrc/



卓球部

現場の知恵　～リスコミ 七つの覚書

北海道大学農学部を拠点に2004年以降、遺伝子組換え作物（GMO）や牛海綿状脳症（BSE）など社会的対立を生み出している課題を中心にして、実践的な対話の場が積み重ねられてきました。その中で、食べることは農業の問題と繋がっているという意識が共有されました。私たちは、安全・安心という狭い意味の食のリスク問題から、食卓の問題は農家の田畑から始まるフードチェーンをも、それ以外のことをも考える必要があるということです。

BSEでは問題のフェイズを強く意識し、時の経過による問題の変容や社会状況の変化で、コミュニケーションのデザインの仕方が異なると身をもって知りました。GMOでは、市民も問題解決の議論に連なっていけるようにと、ステップを踏んで発展するコミュニケーションを考えました。

自ら学習し考えようとする人々との協働を通して、問題が顕在化する前のコミュニケーションの重要性も知りました。その上、課題構築のためのコミュニケーションも3タイプに類型化できました。

そうやって実践を重ねる中で私たちは実践しつつ、「場をつくる側にとっての戒め」を常に意識してきました。2017年夏に、プロジェクトに参加している大学院生の手を借りて現場の知恵として整理しましたので、幾つかを紹介します。

北海道大学大学院農学研究院客員准教授

吉田 省子

リスコミ 七つの覚書

1. リスコミの目的は多様です。説得ではありません。
2. イベントは対象者に合わせて。お仕着せは嫌われます。
3. リスコミは力の行使です。誰かを傷つけないように注意しましょう。
4. 誰が、何を、どのように伝えるのか。それ次第で、言葉の意味は変わります。
5. リスクの受け止め方は十人十色。科学だけでは決まりません。
6. 「正しい方向に導こう」という気持ちを捨てる。「正しさ」を考える場がリスコミです。
7. 一度でできなくても、同じテーマで、同じ人々と場を重ねること。続けることで見えてくるものもあります。